

Edita Gruberová

類まれなる美声と驚異的な声楽テクニック！
17年ぶり、最後の札幌公演は札幌を響かす歌聲を堪能ください！
奇跡のディーヴァ、グルベローヴァの驚異の歌声を堪能ください！

エディタ・グルベローヴァ (ソプラノ)

Edita Gruberová, Soprano

世界屈指の類まれなる美しい声と驚異的な声楽テクニックを併せ持つ世界的コロラトゥーラ・ソプラノ歌手グルベローヴァは、ブラティスラバ、ブラハ、ウィーンで声楽を学び、その才能は早くから開花。1968年、ブラティスラバで歌劇「セビリアの理髪師」のロジーナ役でデビュー。1970年にはウィーン国立歌劇場と契約し「魔笛」の夜の女王役でウィーンデビューを飾った。1973年、夜の女王役でグラインドボーン音楽祭に初出演。1974年、ザルツブルグ音楽祭にカラヤン指揮による夜の女王役でデビュー、1976年にはバーム指揮によるウィーン国立歌劇場の「ナクソス島のアリアドネ」でセンセーショナルな大成功を収めツェルビネッタ歌いとしての名声が各地を駆け巡った。1980年にはウィーン国立歌劇場の日本公演に同行し初来日を果たしている。新しいスターの地位を得たグルベローヴァは、続いて「ルチア」の公演でも大成功を収め、コロラトゥーラ歌手としての名声を確立した。その後はベルカント・オペラへとレパートリーを拡大し、1984年、ベッリーニの「カプレーティとモンテッキ」ジュリエッタ役でコベントガーデンのロイヤルオペラハウスにデビュー。1987年、ドニゼッティの歌劇「連隊の娘」マリア役でミラノ・スカラ座に出演する他、ベッリーニの「夢遊病の女」のアミーナ、「清教徒」のエルヴィーラ、「アンナ・ボレーナ」の題名役、「シャモニーのリンダ」の題名役などで世界中のオペラハウスから出演を待ち望まれる存在となっていく。

2003年には、レパートリーにベッリーニの「ノルマ」を加え、各地で公演を行うなど、今なおオペラ界のトップを走り続けている。2018年に最後の日本ツアーを予定しているが、札幌公演は今回が最後となる。



© http://lukasbeck.com

ペーター・ヴァレントヴィッチ (指揮)

Peter Valentovic, Conductor

ウィーン国立音楽大学で初めてオペラ「フィガロの結婚」「ドン・パスクワーレ」を指揮し、その素晴らしさから「類まれなるアーティスト」を受賞。2003年にはオペラ・バスターニユとパリ・シャトレ座でヴォーカルコーチを務め、ジョン・エリオット・ガーディナーと共に働く。その後ヤナーチェク・フィルハーモニー管弦楽団等、多くのオーケストラを指揮し、トルコ国立歌劇場の常任指揮者に就任。2004年にスロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団の指揮をきっかけに多くのオファーを受けるようになり、スロヴァキア国立歌劇場で「リゴレット」初演を指揮。2012年にはウィーン国立歌劇場のヤナーチェク作品の新演出の総責任者を務めるようになる。2013年9月にはウィーンでのエディタ・グルベローヴァのガラ・コンサートで指揮をする他、アルトゥーロ・トスカニーニ・フィルハーモニー管弦楽団、スロバキア・フィルハーモニー管弦楽団など共演多数。レパートリーは、交響曲に加え、ドン・パスクワーレ、ナブッコ、カヴァレリア・ルスティカーナ、椿姫、アイダ、などのイタリアオペラ、フィデリオ、さまよえるオランダ人、サロメなどドイツの大作を得意とする。

札幌交響楽団 Sapporo Symphony Orchestra

1961年に発足、北海道唯一のプロ・オーケストラとして、「札幌」の愛称で親しまれている。透明感のあるサウンドとパワフルな表現力は雄大な北海道にふさわしいオーケストラとして広く知られている。歴代指揮者は名誉創立指揮者の荒谷正雄、ペーター・シュヴァルツ、岩城宏之、秋山和慶、尾高忠明などが務めた。現在、首席指揮者のマックス・ボンマーのほか、名誉音楽監督の尾高忠明、名誉指揮者のラドミル・エリシュカ、指揮者として佐藤俊太郎と垣内悠希を擁し、2017年4月から友情客演指揮者に広上淳一を迎えた。年に約120回のオーケストラ・コンサートを行うほか、積極的に地域活動に参加、年に約50回の小編成での教育福祉活動を行っている。海外公演はこれまでに、アメリカ、英国、ドイツ、イタリア、東南アジア、韓国、台湾を訪問、各地で好評を博した。レコーディングにも積極的で、尾高とのシベリウス、エリシュカとのドヴォルジャーク、ブラームス、チャイコフスキーなどがある。ボンマーともメンデルスゾーン、ブルックナー、シューマン、R.シュトラウスがリリースされ、専門誌、新聞で推薦盤に選ばれるなど、高い評価を得ている。



© Y.Fujii



© Adrian Vavio